

⑨日本国特許庁  
公開特許公報

⑩特許出願公開  
昭54-5785

⑪Int. Cl.<sup>1</sup>  
G 01 N 25/72

識別記号

⑫日本分類  
112 H 02

庁内整理番号  
7621-25

⑬公開 昭和54年(1979)1月17日

発明の数 1  
審査請求 未請求

(全 2 頁)

⑭非破壊検査装置

三菱電機株式会社生産技術研究所  
内

⑮特 願 昭52-71260

⑯発 明 者 麻生博司

⑰出 願 昭52(1977)6月15日

尼崎市南清水字中野80番地 三  
菱電機株式会社生産技術研究所  
内

⑱発 明 者 房安敏広  
尼崎市南清水字中野80番地 三  
菱電機株式会社生産技術研究所  
内  
同 広本勉  
尼崎市南清水字中野80番地 三

⑲出 願 人 三菱電機株式会社  
東京都千代田区丸の内二丁目2  
番3号

⑳代 理 人 弁理士 葛野信一 外1名

明 開 書

1. 発明の名称

非破壊検査装置

2. 特許請求の範囲

- (1) 検査対象物として構成された被検査構造物の表面に探傷を致すため、液体を均一に塗布させる装置を備え、上記装置の液体の塗布状況によって上記検査構造物の検査状況を検査するようにした非破壊検査装置。
- (2) 液体に水を用いたことを特徴とする特許請求の範囲。1項記載の非破壊検査装置。

3. 発明の詳細な説明

この発明は検査対象物として構成された被検査体の表面部の非破壊検査装置に関するものである。検査対象物として構成された被検査体などの検査部の検査状況を非破壊検査をするのには従来、の方法があり、原理的にはいくつかの方法に分れるが、この発明は被検査体の表面の状況を、その被検査体の表面温度分布によって検知して、被検査体における検査状況を知らしめるものである。

ある。

従来、この問題を有効に解決したものとしては探傷法、探傷法などが知られている。第1図はこの探傷法を説明するための断面図で、図において(1)は被検査部(2)、(3)と支持板(4)とを被検査部(1)で被検査部合してなる構造物で、この構造物(1)の被検査部の良否を検査しようとするものである。まず、通過を目的で、この被検査部(1)に電圧を加え、しかる後に電圧(1)側から電圧、探傷部(1)側などによって、被検査部(1)より良否を与える。このとき、被検査部(1)の表面では、同一検査部であるべき構造で被検査部の状況に差異が生じたならば、探傷部(1)は良否が不良であると検知できる。

また、被検査部(1)の代り代り品を均一に塗布して被検査部(1)の被検査部の良否を被検査部の色変化で知り、これによって被検査部の良否を判断する。

しかしながら、これらの方法ではそれぞれ特

1/2

猪および豚品の脂肪という脂肪を作業をした上、更に被焼体を加熱するための装置が必要であり、殊にこの加熱が均一でなければ快速効果は僅微で、均一な加熱といふことは素外脂肪を作業できる。更に、油脂は乾燥後には被焼体から揮発を防止せねばならない。

この発明は以上従来方法の欠点に満ちてなされたもので、通常の雰囲気中で換気体に蒸気を吹きつけ、その換気体上に析出した液体の腐蝕状況によつて腐食状況を検査する非破壊検査装置を提供せんとするものである。

オミ図はこの場合の一実施例の構成を示す模式正面図である。図示のように、適当な自開の上置型か九段式排水口に水漏れ発生監視部として付いた副管をこれに水漏れ側を防水部と略から被す副管付けた後水漏れ監視部を付けて監視管路上の水分の漏れ状況を監視する。この水分の高減は制御装置の調整が必要であるので、排水発生部の各部分からその漏れを率つて監視が行われる。従つて、監視管は排水口の副管の

特開 昭54--5785(2)  
肺容量の差によつて蒸発状態に差異を生じる。  
この肺容量の差はその個所の蒸着割合状況に依  
存するので、蒸発状況によつて目的の非破壊検  
査ができる。

この実験例において、台座をコンベア等で移動させるようにすれば連続検査も可能になる。なお、実験例では水蒸気を用いたが他の液体の蒸気を用いてもよい。

以上詳述したように、この発明によれば、被換体より高熱の蒸気を生じさせる蒸気発生器を用いるのみで新舊混合体の混合状況を非破壊検査できる取扱い容易な装置が実現可能とされ、この装置によれば検査後の被換体の処理も全く不要である。

#### 4. 図面の簡単な説明

才1図は従来の凍船法を説明するための新視  
図、才2図はこの発明の一実施例の凍成を示す  
模式正面図である。

図において、①は鼓膜、②は錘骨、③は砧骨、④は鐙骨、⑤は前庭窓、⑥は後庭窓、⑦は蝸牛の螺旋殻、⑧は蝸牛の基底膜、⑨は蝸牛の頂蓋、⑩は蝸牛の基底膜、⑪は蝸牛の頂蓋、⑫は蝸牛の基底膜、⑬は蝸牛の頂蓋、⑭は蝸牛の基底膜、⑮は蝸牛の頂蓋、⑯は蝸牛の基底膜、⑰は蝸牛の頂蓋、⑱は蝸牛の基底膜、⑲は蝸牛の頂蓋、⑳は蝸牛の基底膜、㉑は蝸牛の頂蓋、㉒は蝸牛の基底膜、㉓は蝸牛の頂蓋、㉔は蝸牛の基底膜、㉕は蝸牛の頂蓋、㉖は蝸牛の基底膜、㉗は蝸牛の頂蓋、㉘は蝸牛の基底膜、㉙は蝸牛の頂蓋、㉚は蝸牛の基底膜、㉛は蝸牛の頂蓋、㉜は蝸牛の基底膜、㉝は蝸牛の頂蓋、㉞は蝸牛の基底膜、㉟は蝸牛の頂蓋、㊱は蝸牛の基底膜、㊲は蝸牛の頂蓋、㊳は蝸牛の基底膜、㊴は蝸牛の頂蓋、㊵は蝸牛の基底膜、㊶は蝸牛の頂蓋、㊷は蝸牛の基底膜、㊸は蝸牛の頂蓋、㊹は蝸牛の基底膜、㊺は蝸牛の頂蓋、㊻は蝸牛の基底膜、㊼は蝸牛の頂蓋、㊽は蝸牛の基底膜、㊾は蝸牛の頂蓋、㊿は蝸牛の基底膜。

なお、図中同一符号は同一もしくは相当部分を示す。

代理人 葛野 勉 一 (ほか1名)

